

Editor's eye

・特集・

水疱をきたす疾患

編集担当 久保 亮治

私が皮膚科医になったばかりのころは、天疱瘡の自己抗原としてDSG1とDSG3が同定され、先天性表皮水疱症の原因遺伝子としてCOL7A1などが次々と同定された時期であった。表皮上層を中心に表皮全層に分布するDSG1と表皮下層に分布するDSG3との発現分布様式から落葉状天疱瘡と尋常性天疱瘡の水疱形成位置の違いが説明され、先天性表皮水疱症ではそれぞれの原因遺伝子産物の分布と機能から表現型が説明されるなど、分子の言葉で病理や病態を説明できるのだという事実に感動したことが、研究と臨床の二足のわらじを履く自分の人生を決定づけたように思う。今回はそんな思い入れのある「水疱」をテーマに選ばせていただいた。

水疱形成の原因として、自己抗体による自己免疫性の水疱、おそらくはT cell immunityが主要要因と考えられる薬剤性や苔癬反応による水疱、ウイルス感染や抗癌剤などの細胞障害性の反応や細胞死のメカニズムが関与すると考えられる反応による水疱、好酸球や好中球性の反応が関わるのではないかと考えられる水疱、細菌が分泌するプロテアーゼによる水疱など、さまざまな要因による水疱性疾患の症例を「臨床例」では取り上げた。また、「研究」では抗原検査キットが利用可能になったヘルペス感染症を、「総説」では亜鉛欠乏症と、個人的にもっとも思い入れ深い自己免疫性水疱症を取り上げさせていただいた。

医学が大きく進歩しさまざまな病態が解明されてきたことを感慨深く振り返るとともに、まだまだ解き明かすべき謎が残っていることを感じていただければ幸いである。